エルヴェシウスに対するルソーおよび ディドロの哲学・教育論争について

——フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題——

(その12)

永 治 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(教育学教室)

〔エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について〕
——フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題——
(その1~その11)
『愛知教育大学研究報告(教育科学)』第25輯~第27輯
第31輯~第38輯, 1976年~1978年, 1982年~1989年

X エルヴェシウスに対するディドロの批判(下の八)

—教育の改革と哲学者の使命—

11. 『人間論』第十篇へのディドロの批判—教育の改革と哲学者の使命—

百科全書派の思想家としてエルヴェシウスおよびディドロの間には、共通の立場と類似した性格が基本的には存するが、またいくつかの側面において重要な相違・背離が認められる。『人間論』と『〈人間論〉への反駁』の照合を糸口としながら、先回まで筆者はそうした類似や背反の根源、すなわち両者の人間観、能力観、道徳理論、経済理論、等々の究明に主力を注いできた。これら両書のなかでは宗教批判を中心とする第七篇、幸福や福祉を主題とする第八篇、政治改革の構想を綴る第九篇なども種々の問題を孕んでいる。とはいえ、本稿では一気に「人間論」の最終篇へと進み、教育の領域における両者の論議を検討したい。

『人間論』の掉尾を飾る第十篇は教育の改革を論じ、エルヴェシウスの思想における結論的な部分と考えられる。しかしながら、本稿〈その5〉で検討したとおり、ディドロの論駁は『人間論』の前半に偏重し、同書最終篇全93頁に対する論駁は僅か5頁にすぎない。⁽⁴⁾

『〈人間論〉への反駁』においてこの思想家は、本質的な問題の提起と現実への天才的な洞察をしばしば示す反面、あまりにも散漫で皮相な論議に走ることも稀ではない。また、エルヴェシウスの理論的な構築を軽く考え、彼の主張を曲解・歪曲する論述すら、筆者は幾度かディドロに関して指摘した。⁽²⁾『人間論』第十篇が有する重要な意義とは対照的に、『人間論〉への反駁』第十篇はディドロの特色を多少は感じさせるものの、断片的・末梢的な論評に陥り勝ちである。両書の照合を今回の中心的な課題としながら、エルヴェシウスの主張とそれに対するディドロの論駁を章毎に吟味してみよう。

「教育の力。教育を改善する方策。このような学問を妨げる障害。そうした障害が除去されれば、優れた教育の構想を立案するのは、容易であること。」これが『人間論』第十篇に付せられた全体的な論題である。つぎに同篇各章の題目と頁数を誌し、ディドロによる批判の程度を示す。

『人間論』			『〈人間論〉への反駁』	
章	題 目	頁数	批判箇所	頁数
1	教育は万能である。	9	0	0
2	君主の教育。	5	1	1
3	家庭教育に対する公教育の利点。	5	1	2
4	身体教育についての一般的概念。	5	1	1
5	人間はいかなる時期や状況において精神教育を受け入れるか。	3	0	0
6	さまざまな職業に関する教育。	7	0	0
7	人間の道徳教育。	19	0	0
8	聖職者の利益。人間の道徳教育の改善を妨げる第一の障害。	7	0	0
9	ほとんどの政治の不完全さ。人間の道徳教育の改善を妨げる第二の障害。	8	1	2
10	道徳教育の重要な改革は、すべて国法および政治形態の改革を前提とする。	6	1	1
11	こうした進歩を妨げる障害が除去されたのちの教育。	8	0	0
補遺		11	0	0

『人間論』第十篇の第一章「教育は万能である」は序論的な部分であり、いわゆる環境・教育決定論を簡潔に述べている。人間形成における教育と環境の重要性は同書第一篇で詳細に論証され、それに対してディドロは本質的な疑義を再三提起している。そのためか第十篇第一章についてはなんらの論評も示していない。

同篇第二章「君主の教育」でエルヴェシウスは、環境・教育決定論の見地から英明な君主の出現には悲観的な見通しを述べる。卓越した帝王を育てることは、ルネサンス以降教育論の重要な論題のひとつであるが、エルヴェシウスの立論に呼応して、ディドロも帝王への期待には冷笑を浴びせる。開明的な君主への幻想、権力者による上からの改革として百科全書派の思想はしばしば非難される。しかし、以下に掲げる両者の論述に照らしても、そうした評価を安易に受けることはできない。

〈資料36〉

A. エルヴェシウス著『人間論』第十篇第三章

君主の教育

「玉座のうえで生れた国王が、玉座に相応しいことは稀である。」フランスのある詩人はこう語った。一般に君主が天才的な人物となりうるのは、厳格な教育によって鍛えられ、幼時からさまざまな危険に包囲され、幾多の苦難を体験する場合だけである。将来他者を指揮する人々にとっては、極度に厳格な教育がもっとも適切な教育である。

紛争と軋轢の時代においてこそ、君主がこの種の教育に浴する。ほかのどんな時代でも君主に与えられるのは、儀礼の教育だけであり、それは教育の根源である統治形態と同じく、劣悪で変え難い。

そんな教育になが期待できるか。トルコにおける王位継承者の教育はどんなものか。後宮の一隅に隠れ住む若い皇太子は伴侶ないし慰めとして、ひとりの女性と一台のつづれ織機を有している。彼がその隠れ家から出るのは、毎週厳重な監視のもとに、皇帝への謁見を果すときだけである。〔中略〕

トルコでは皇帝も臣民も、だれも考えない。ヨーロッパのさまざまな宮廷においても、皇太子の教育が近東での教育に接近するにつれて、同じような事態になる。⁽³⁾

B. デイドロ著「〈人間論〉への反駁」第十篇第三章

〔『人間論』下巻337頁〕

ルシアンから引用された章句がここに見出される。ただし、『人間論』の著者が初めて引合いに出す言葉ではない。だが、出所がルシアンでも、ほかの人でも、己れ自身でも、私はやはりこの言葉を尊重する。

ジュピターは食卓につく。彼は妻に冗談を言う。彼はヴィーナスに含みのある言葉を向ける。彼はへべを優しい眼差で眺める。彼はガニユメデスの尻を叩く。彼は盃に注がせる。飲みかけた彼は、地上のさまざまな地方から、叫び声が響くのを耳にする。叫び声が一段と強まる。彼は迷惑そうになる。彼は苛立ち、立ち上がる。彼は天空の出窓を開き、そして言う。「アジアではペスト、ヨーロッパでは戦争、アフリカでは飢饉、ここでは凍結、かしこでは台風、よそでは噴火。」このように怒鳴って、ジュピターは出窓を閉ざし、食卓に帰り、酒に酔い、床に就き、眠り込む。これを称して彼は言う。世界を統治する、と。地上におけるジュピターのある代理人は、朝起き、ココアかコーヒーをみずから用意し、読みもせずに勅令に署名し、狩猟に出かけ、森から帰り、着替えをし、食卓に就く。そして、ジュピターや荷役人夫と同じように、酒に酔う。愛人と同じ枕で寝ることもあろう。これを称して彼は言う。己れの帝国を統治する、と。⁽⁴⁾

『人間論』第十篇第三章は私教育に対する公教育の優位を五カ条に纏めて述べている。国民全体を対象とする公教育の実現は、啓蒙思想の基本的な提唱のひとつであり、やがてコンドルセによって理論的に確立される。平等という理念の貫徹や民衆に対する啓蒙・教化を力説するコンドルセの理論が卓越していることは勿論であるが、エルヴェシウスが

挙する五つの特色も、家庭教育に対する優位にとして重要であり、革命期に構築される公教育理論の先駆とも言えよう。⁽⁵⁾これに対するディドロの反駁は、個性の軽視や学業の画一化を警めるものの、公教育をめぐる論議としては貧弱である。なお、ディドロの教育思想におけるふたつの要素、すなわち『エカテリーナ二世のための覚書』における公教育の推進と『〈人間論〉への反駁』に散見する個性・天才への配慮については、本稿〈その7〉でやや詳細に検討した。

〈資料37〉

A. エルヴェシウス著『人間論』第十篇第三章

家庭教育に方する公教育の優位

そうした利点の第一としては、〈青少年が健全な環境で教育を受けること〉が挙げられる。

家庭教育では子どもは両親の家に住み、大都会におけるそうした家は往々手狭かつ不健全である。

反対に公教育では学舎が田園に建てられ、周囲の空気が良い。そこでの広大な敷地によって、身体の強化と健康の保持に役立つあらゆる訓練を、青少年は行うことができる。

そうした利点の第二は〈規範の厳格さ〉である。

両親の家では公教育の学舎ほど、規範が厳密でない。コレージュにおいては万事が時間に服従する。そこでは時計が教師や用務員に命令する。それが食事と学習と余暇の長さを定める。それが秩序を維持する。秩序のみられぬところ、継続的な学習もありえない。秩序によって日々が長くなり、無秩序によって日々も短くなる。

第三の利点は〈競争心の喚起〉である。

少年期における主要な動因は、恐怖と競争心にほかならぬ。

自己を沢山の他者と比較するところから、競争心が生まれる。

才能と徳への愛を喚起するあらゆる方策のなかで、競争心こそもっとも確かな手段である。ただし、両親の家に留まる子どもは、この種の比較ができない。彼らの教育はそれだけ見劣りがする。

第四の利点は教師の聡明さである。

人間のなかには、したがって父親のなかには愚鈍な人と英明な人が存在する。どんな教育を息子に授けたらよいか、愚鈍な人は知らない。それを英明な人は知っている。だが、理解を容易にするため、どのような仕方でも息子に観念を授けるべきか、彼らも弁えていない。自己の体験や歴代の経験をとおして、コレージュですぐに獲得できる実際の知識が、教養豊かな父親にもしばしば欠けている。

公教育が有する利点の第五は、毅然たる性向にある。

家庭教育が勇壮で果敢であることは減多にない。両親は子どもの身体的な保全だけを心配して、彼らが悩みはしないかと恐れ、彼らのあらゆる気粉れに譲歩し、そうした怯懦な迎合を親の愛と称する。⁽⁶⁾

B. ディドロ著『〈人間論〉への反駁』第十篇第三章

〔『人間論』下巻380頁〕「競争心は家庭教育を凌ぐ公教育の主要な利点のひとつである」

私は人生の初期を公教育の施設で過し、学級で抜きん出た4名か5名の生徒が、どの学年でも代るがわる優等生となって、残りの全員がやる気をなくすのを見てきた。

そうした少数のエリートに教師の配慮がすべて傾注され、ほかの生徒がみな等閑にされているのを、私は見てきた。

すこしもなじみのない古代語の学習のため、それら5名か6名の生徒が6年または7年の間驚くほど勉強するのを、私は見てきた。

そうした生徒がみな愚鈍な男、無知な男、墮落した男となって、コレージュから巣立つのを、私は見てきた。

そうした生徒が6人の教師に次々と委ねられ、それらの教師がみな自分流の教育方法を有することを、私は見てきた。

公的証書を2名か3名に確保させるため、生徒の一般的な教育が等閑にされるのを、私は見てきた。

貧者の子どもにとって不動の規範が、富者の子どものあらゆる勝手気ままに屈するのを、またそうした富者の子どもが、週に2度両親の家に帰って、学習への嫌悪を募らせ、それを級友の間に伝播するのを、私は見てきた。

だから、私は叫ぶ。自分のもつで子どもを育てることができなのに、彼を公教育の施設に送る父親に禍あれ！

世間に出たあと、こうしたコレージュの教育からなにが残るか。皆無である。コレージュで育った人間が、文筆界で傑出することもあるが、そうした学識を彼らはどこで摂取したか。また、なにがそれを可能にしたか。自身の研鑽による。学校の腰掛のうえで空費した時間を、彼らは己れの書齋において幾度悔やんだであろう。

では、なにをなすべきか。公教育の施設におけるやり方を徹頭徹尾変革するほかない。

つぎには？ つぎには、富者であれば、子どもを自分のもつで育てるがよい。

ギリシア人およびローマ人の教育は家庭においてなされ、ほかの仕方にひけを取らなかった。

ひとりの教師のあらゆる配慮をひとりの子どもに集中させるほうが、同じ教師の配慮をその子どもと百人の子どもに小分けするよりも、恩沢が少ないとしたら、まったく奇妙である。

母親がだらしなない場合にのみ、女の子を修道院に入れてもよい、と私は思う。

馬車のため3000フラン、料理人のために6000フランを払いつつ、父親が500フランで有能な人材を得ようと考えた場合にのみ、男の子をコレージュに入れてもよい、と私は思う。⁽⁷⁾

『人間論』第十篇第四章は身体教育を主題とし、古代ギリシアの事例を挙げて体育の重要性が説かれている。しかし、人間の精神的・社会的側面を重視するエルヴェシウスは、身体の保全や訓練については関心が薄い。これがロックやルソーの教育と異なる顕著な特

徴である。この章の叙述は短簡であって、ディドロも論評を加えていない。

つづく第五章も1頁に充たず、第六章以下への導入とみられる。社会的結合と社会契約の成立によって、道徳と道徳教育が必要になる、とここでは『人間論』第二篇の主要な結論が確認される。

中心的な論題である道徳教育へ進むまえに、第十篇第六章としてエルヴェシウスは専門的職業教育について言及し、音楽家、画家、詩人などを例示しつつ、早期からの教育を提唱する。適切な教育によって傑出した芸術家を育成できる、というエルヴェシウスの断定に抗して、ここでディドロは素質や天分の先天性を再度強調する。ただし、この箇所における論述は両者ともあまりに短簡である。なお、早期教育や専門教育に関しては、能力の形成を詳細に論じた『精神論』第三篇、「学習」と題する同書第四篇第十六章に、興味深い理論の展開がみられる。

つぎの第十篇第七章においてエルヴェシウスの教育理論は頂点に達し、キリスト教的な道徳教育に代えて、近代的な道徳教育の構想が明示される。カトリックの教義を論破し、近代的な道徳を構築することは、『精神論』および『人間論』の主要な課題のひとつであった。中世的な秩序や規範に忠実な人間ではなく、社会の発展と国民の福祉に寄与する公民を育成するため、ここでは道徳教育の具体的な教育内容が提案される。「道徳科学」の成果を踏まえた「道徳問答書」がそれであり、人間の生存および生活、社会的結合と社会契約の成立、労働と所有の発展、道徳と法律の意義が順次教えられる。この章は41項目にわたる問答を含み、19頁に及ぶ長文であるが、ディドロはなんらの論評も付していない。

〈資料38〉

エルヴェシウス著『人間論』第十篇第七章

人間の道徳教育。

道徳に関するもっとも明快で厳密な観念を培うには、いかにすればよいか。つぎのような問答を行うがよい。

〔問〕 人間とはなにか。

〔答〕 理性的動物である、とひとは言うが、感性的動物、か弱い動物、繁殖する動物であることは確かと思われる。

〔問〕 感性的動物として人間はなにをするか。

〔答〕 苦痛を避け、快楽を求める。そして、このような不断の追求と回避が自己愛と名づけられる。

〔問〕 それでは、か弱い動物として人間はなにをするか。

〔答〕 ほかの人間と結合する。あるときは己れより強い動物から身を護るために、あるときは獣と闘って、生活の資を得るために、またあるときは食物として有用な獣を捕獲するために。そして、ここから狩猟と漁撈に関するあらゆる契約が発生する。〔中略〕

〔問〕 農耕の必要からなにが生ずるか。

〔答〕 所有の必要が生ずる。

〔問〕 所有の契約はどの範囲にまで及ぶか。

- 〔答〕 己れの身体、思考、生命、自由、財産まで。
- 〔問〕 所有の契約がひとたび結ばれると、その結果どうなるか。
- 〔答〕 契約を蹂躪する者、すなわち泥棒、人殺し、狂信家、圧政者などへの刑罰が現れる。このような刑罰を廃止すれば、人々の間のあらゆる契約は水泡に帰する。他者の所有を侵害しても、罰せられなければ、人々はただちに戦争状態に入る。このとき人々の間のあらゆる結合は解消し、獅子や虎に出逢うように、彼らはたがいに逃れ合う。〔中略〕
- 〔問〕 勿論正義が国を支配せねばならぬ。そして、正義は法によって国を支配すべきである。だが、すべての法が同じ本性を有するか。
- 〔答〕 そうではない。それらのなかにはいわば不易の法がある。不易の法なくして、社会は存続できないか、少なくとも安寧に存続できない。所有に関する基本法もこの種のものである。
- 〔問〕 その種の法を無視することが許される場合があるろうか。
- 〔答〕 ありえない。ただし、祖国の存亡に係わる稀有の事態は別である。
- 〔問〕 そのとき法を無視できる権利はどこから発するか。
- 〔答〕 一般利益から、すなわち侵すべからざる唯一の法からである。
- 人民の安寧こそ、至上の法であれ！
- 〔問〕 至上の法のまえでは、すべての法が沈黙すべきか。
- 〔答〕 そうである。トルコの軍隊がウイーンに進撃するとき、立法者は同胞の所有権を一時的に侵すことができる。すなわち、迫りくる敵軍を飢えさせるため、作物を取り払い、穀倉を焼き尽すことが許される。
- 〔問〕 法は神聖であって、改正できないか。
- 〔答〕 最大多数の人々の福祉に反するときは、改正すべきである。⁽⁸⁾

以上のようにエルヴェシウスによる教育改革の提案は近代的な道徳教育・公民教育の実施を中軸としている。ついで彼はそれに対するふたつの障害を指摘し、教育改革の難しさを慨嘆する。そうした障害の第一として宗教的な団体が第十篇第八章で非難され、また第二の障害として専制政治が同篇第九章で批判される。

宗教的な団体、とくにカトリック教会への非難は『人間論』の序論から第九章に至るまで頻繁にみられ、ここではとくに教育の非宗教化が力説される。ディドロもカトリック教会への不信をしばしば表明しているが、この章には論評を加えていない。

宗教的な団体と同じく、専制的な権力者も私的な利益を追求し、国民全体の福祉を侵害する。独裁的な政治が道徳の頹廃と教育の混迷を必然的に招くことを、エルヴェシウスは第九章で具体的に綿密に語る。ここでは政治と道徳の密接な関連が浮彫にされ、政治改革と教育改革の結合が急務として訴えられる。これに対するディドロの論駁は、道徳や道徳意識の自立性を暗示するものの、あまりにも断片的かつ末梢的である。

なお、本稿〈その5〉で述べたとおり、ディドロは教育改革の構想と政治改革への助言をエカテリーナ二世に捧げた。しかし、帝政ロシアに対する彼の批判は、エカテリーナ二世を激怒させ、両者の友好関係が急速に冷却する。専制政治が存続するかぎり、道義の確立と教育の改革が至難の業であることを、ディドロも痛切に感じていた。

<資料39>

A. エルヴェシウス著『人間論』第十篇第九章

ほとんどの政治の不完全さ。人間の道徳教育の改善を妨げる第二の障害。

人間がふたつの教育を受けることを、すでに私は述べた。

少年期の教育。これは教師によって授けられる。

青年期の教育。これは自国の政治形態と自国民の習俗によって授けられる。

これらふたつの段階の教えが矛盾撞着するところでは、少年期の教育は無に帰する。

少年期から息子に私が祖国愛を鼓吹したと仮定しよう。有徳な行為の実践、すなわち最大多数の人々に有益な行為の実践と、彼の幸福が結合するよう苦心したと仮定しよう。世間に出た息子は、愛国者が蔑視と抑圧の谷に低迷するのを、ただちに見る。都会で傷ついた有徳な人物が、権力者と富者に憎まれて、宮廷からも、つまり恩恵と栄誉と財富(勿論これが実際の幸福である)の源泉からも追放されるのを知るならば、息子が私をたんに愚劣な妄信家、峻厳な狂信者とみなし、私の人格をも軽蔑することは、九割九分確かである。また、こうした私への軽蔑は授けられた規範にも波及し、自国の政治形態と己れの同胞の習俗に是認されたあらゆる悪徳に、彼が身を委ねることも確かである。

反対に少年期の教えが青年期においても忘却されぬ国、教師から学んだ規範が、公衆の称讃を受ける場面に、世間で若者が出会う国では、そうした規範への尊敬がますます深まり、少年期の教えが行為の準則とされ、息子は有徳な人物になる。⁽⁹⁾

B. デイドロ著『<人間論>への反駁』第十篇第九章

『人間論』下巻405頁『少年期に私から授けられた原則が、栄誉と財富への道を閉ざす、と私の息子が世間の風習から悟った場合、彼が私をたんに愚劣な妄信家、峻厳な狂信者とみなし、私の人格をも軽蔑することは、九割九分確かである。また、こうした私への軽蔑は授けられた規範にも波及し、自国の政治形態と己れの同胞の習俗に権威づけられたあらゆる悪徳に、彼が身を委ねることも確かである』

韻文であれば、このような誇張も容認しよう。散文としては、容認できない。正しく育てられた子が、栄誉を手にし、財富を得るに役立つ方策と、父親から授けられた教えが両立しないと悟ったとき、彼は森のなかに迷いこんだヘラクレスのように、進むべき道がまず判らなくなる。少しずつ世間一般の腐敗が彼に覆い包む。それまでに与えられた徳への教えが、彼から忘れられる。奔流に彼は身を委ねる。善を知り、善を肯定しながら、彼は悪を行う。だが、無秩序の渦中であっても、そうした子は父親を尊敬している。彼にとって父親は老いぼれた愚者では断じてなく、見做うことの難しい義人なのである。父親の人格を軽蔑することも、父親の原理を莫迦にすることも、彼には起りえない。そうした子はみずからの悪徳をけっして自慢しない。狼たちと調子を合わせねばならぬ、と彼はただ己れを弁護する。ただし、このような墮落への行程は、環境や性格によって早くもなり、遅くもなる。⁽¹⁰⁾

『人間論』の終結に近い第十篇第十章で、エルヴェシウスは政治改革と教育改革の見通

しを語り、困難な状況における哲学者の使命について述べる。彼晩年の政治状況や心理状態を反映して、とりわけこの一文には先駆者としての悲壮感が漂う。ディドロの論評はここでもやはり短簡であるが、未来に対するエルヴェシウスの信念と熱意に心から共感の言葉を送っている。

〈資料40〉

A. エルヴェシウス著『人間論』第十篇第十章

道徳教育のいかなる改革も国法および政治形態の改革を前提とする。

邪悪な政治のもとで優れた教育の構想を提案したと仮定する。受け入れられる、と確言できるか。自惚れである。そうした立案者は視野が狭く、過度の期待を抱いている。新しい教育によって授けられる教えが、習俗および政治に矛盾したと仮定しよう。そのような教えはかならず悪しきものとみなされる。どんなときにそれが採択されるか。民族が大きな苦難や大きな災厄を体験し、そうした状況の異常かつ適切な輻輳が、君主に改革の必要を痛感させたときである。これとは異なる場合でも意があれば、優れた教育の原理について思索することはできる。原理の発見は原理の確立に当然先立つ。ひとつの学問に専念し、新たな真理を見い出せばみい出すほど、そこにおける原理をますます簡明にできる。それらが採択されることを、ただちに求めないとしても……。

これまでに多くの傑出した人物がこの論題に大きな光明を投げかけた。だが、教育は依然として変わらない。なぜか。優れた教育の構想を考えるには聡明であればよいが、それを実現させるには権力が必要だからである。したがって、この分野における最良の著作が、顕著な変化をいまだ惹起しないのも、驚くにあたらず。では、最良の著作をも無益とみなしてよいであろうか。そうではない。これらは教育科学を実際に前進させてきたのである。技術者が新しい機械を發明する。彼がその性能をも算定し、有用性をも論証したと仮定する。学問の発展がなされたわけである。機械はまだ製作されていない。それはまだ公衆になんらの恩恵を与えていない。だが、發明されてはいる。それを製作させる富者を見出すことだけが、残された課題である。そして、遅かれ早かれ、そうした富者は見出される。

このように楽しい想念が教育科学の研究へと哲学者を激励する。有徳な市民に相応しい研究があるとすれば、まさしくそうした真理の研究にほかならぬ。なぜなら、それらを認識することが、やがて人類に利益をもたらす。後世の幸福という希望のほかに、どんな希望がこのような労苦を慰めるであろうか。こうした分野における哲学者の発見は、いわば種子であり、理解ある人々の間に蒔かれて、繁茂する機縁を待っている。そして、遅かれ早かれ、そうした機縁は訪れる。

道徳の世界も患者の目にはいつも静止と不動の状態にある。いま映ずるとおりに、すべてが過去も現在も未来も存在する、と患者は信じる。過去と未来のなかに、彼らは現在しか見ない。開明的な人物は違う。永続的な変革による不断の転変という光景を、道徳の世界はこうした人間に提示する。彼らの見方によれば、絶えざる運動を続ける宇宙は、新たな形態のもとに常時再生し、また一切の組合せが出尽し、存在可能

なものがすべて出現し、想定されたものがすべて実現するまで、宇宙は必然的に再生するのである。

したがって、英知の所産である優れた教育の構想を、権力者がやがて採択する時点を、遠きにせよ近きにせよ、哲学者は認知している。このような希望に励まされて、構想の実現に妨げとなる偏見を、あらかじめ掘り崩すよう、彼らは専念するのである。⁽¹¹⁾

B. デイドロ著『〈人間論〉への反駁』第十篇第十章

〔『人間論』下巻409頁〕「これまで多くの傑出した人物がこの論題に大きな光明を投げかけた。だが、教育は依然として変わらない。」

我らの悪しき教師を追放することによって、教育を立ち直らせることが、権力者には可能であり、責務でもある。教育が変わらないのは、彼らの悪意や怯懦によるわけではない。彼らが愚昧だからである。彼らは改革者の考えを幻想とみなす。彼らは古くさい因習を最良のもの信じ、それに甘んじる。人々を実際の姿よりも怖ろしく描かないでほしい。いまのままですべてが順調である、とただ愚者は信じる。

〔『人間論』下巻410頁〕

ほかのところで私が行ったのと同じ激励を、哲学者エルヴェシウスは勇氣ある開明的な人々に与えている。⁽¹²⁾

なお、最後の第十一章で全巻の論旨を要約したエルヴェシウスは、優れた国法と教育によって有能かつ有徳な国民を育成できる、と重ねて強調する。これに対してデイドロは論評を誌していない。

エルヴェシウスに対するデイドロおよびルソーの論争に関しては、以上をもって15年間の遅々たる考察をひとまず終りたい。フランス啓蒙思想が扱った領域の広さと問題の深さに流されて、筆者の論稿は当初の予定を数倍も上まわる長大さとなった。この間に途中で気づいた種々の不備を以後修正する方式を取ったため、論文の構成や表現に多くの差異、撞着、不調和、不整合を生ずるに至った。筆者はこのような混乱をお詫びするとともに、適当な機会に是正・補完する意向である。末尾ではあるが、未熟な論稿の掲載を多年にわたり許された『愛知教育大学研究報告』編集委員会に深謝の意を表したい。

(平成2年9月17日受理)

註

エルヴェシウスとデイドロの著作に関して註では下記の略号を使用する。なおすでに邦訳がある場合も、本稿における引用はすべて筆者自身が訳出した。

DOA : Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. J. Assézat et M. Tourneux, Paris, Garnier Frères, 1975-1877. 20 volumes.

DOD : Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. H. Dieckmann, J. Fabre, J. Proust et J. Varloot, Paris, Hermann, 1975-, 20 volumes parus (sur 33).

DOL : Denis DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. R. Lewinter, Paris, Le Club français du livre, 1969-1973, 15 volumes.

DRL : Denis DIDEROT, *Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme*. dans DOL,

tome XI, pp. 453-653.

HE 1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Esprit*, Paris, Durand, 1758.

HH 1 : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, Londres, Société typographique, 1773. 2 volumes.

HHM : Claude-Adrien HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés intellectuelles et de son éducation*, texte revue par Geneviève et Jacques Moutaux, Paris, Fayard, 1989. 2 volumes.

HOL : Claude-Adrien HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, ed. L. La Roche, Paris, P. Didot l'aîné, 1795. 14 volumes. (Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildsheim, 1967)

NEN : エルヴェシウス著, 根岸国孝訳『人間論』明治図書, 1966年

1) エルヴェシウス著『人間論』の本文は、176の Chapitre から構成され、それらが10の Section に区分されている。『人間論』本文の検討に入った本稿〈その5〉において筆者は Chapitre を節、Section を章と訳し、〈その6〉以降には Chapitre を章、Section を篇と訳し改めた。したがって、〈その5〉の叙述におけるたとえば第四章第二節は、〈その6〉以降の訳語に従い、第四篇第二章と読み替えて頂きたい。『人間論』の構成に合わせたディドロ著『〈人間論〉への反駁』についても同じ混乱を招いている。基本的な資料の標記に関して、こうした訳語の不整合が生じたことは遺憾である。

2) ディドロのエルヴェシウス批判におけるこのような特徴は、下記の論文でも明らかにされている。

Gerhardt STENGER, Diderot lecteur de L'Homme : une nouvelle approche de la *Réfutation d'Helvétius*. dans *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, volume 228 (1984), pp.267-289.

3) HH1, tome II, pp.620-622. cf. HOL, tome XII, pp. 79-81. HHG, tome II, pp.885-886. NEN, pp.155-156.

『人間論』原典としては信頼度の高い1773年の初版本(HH1)を筆者は使用するが、専門的な研究者以外は問題の多いラロッシュ編『エルヴェシウス著作全集』(HOL)をこれまで参照するほかなかったと思われる。しかし、1989年にG・ムトーおよびJ・ムトーの校閲によって初版本を復元した『人間論』(HHM)が出版され、読者への便宜がはかられた。ただし、この復刻版には原文への註解と異文の記載がほとんどなく、現代における校閲本としては充分でないように感じられる。

4) DRL, p.647. cf. DOA, tome II, pp.449-450.

『〈人間論〉への反駁』に関しては、フランス国立図書館稿本部に二組の草稿が保存され(B. N. Fonds Vandeul, ms. N.a. fr. 13725 et 18785)、それらの間には論述の相違が若干認められる。エルマン社『ディドロ全集』の一巻として、R・デスネ校閲『〈人間論〉への反駁』の近刊が予告されており、その上梓が待たれるところである。なお、ディドロは同書第四篇への補遺においても、ジュピターの行状を語りつつ、エルヴェシウスの主張を論駁しているが(DFL, pp.595-598)、この部分にはふたつの草稿の間に顕著な差異がある。

Roland DESNES, Diderot philosophe et conteur : le travail de l'écrivain d'après le manuscrit de la *Réfutation de l'Homme d'Helvétius*. dans *Diderot, Les dernières années 1770-84*, Edimbourg, 1985. pp.213-224.

5) コンドルセとエルヴェシウスの関連についてはつぎの論稿を参照されたい。

拙稿「エルヴェシウスからコンドルセへ—教育思想の継承と発展」中央大学社会科学研究所編『フランス革命とはなにか—現代史認識の再建を目指して(フランス革命200年記念国際シンポジウム報告)』, 近刊。

6) HH1, tome II, pp.625-627. cf. HOL, tome XII, pp.84-87. HHM, tome II, pp.889-890. NEN, pp.157-158.

7) DRL, pp.648-649. cf. DOA, tome II, pp.450-451.

8) HH1, tome II, pp.645-653. cf. HOL, tome XII, pp.101-110. HHM, tome II, pp.903-908. NEN, pp.165-169.

9) HH1, tome II, pp.671-672. cf. HOL, tome XII, pp.126-127. HHM, tome II, pp. 917-918. NEN, pp. 175-176.

- 10) DRL, pp.650-651. cf. DOA, tome II, pp.452-453.
- 11) HH1, tome II, pp.674-631. cf. HOL, tome XII, pp.133-136. HHM, tome II, pp.921-922. NEN, pp.178-179.
- 12) DRL, p.652. cf. DOA, tome II, p.454.